安吾賞 第3回 授賞式

■授与式

安吾賞／瀬戸内寂聴

新潟市特別賞／近藤亨

■瀬戸内寂聴記念講演

「坂口安吾と私」

安吾賞　新潟市ゆかりの作家である坂口安吾は、文学をはじめ多くの分野において何事にも一生懸命に挑み続ける人であった。安吾の精神を具現し、さまざまな分野で挑戦し続けることにより、わたしたち日本人に喝を与えた個人または団体を表彰する「安吾賞」。挑戦者を応援する新潟市は、第3回の安吾賞受賞者として、瀬戸内寂聴氏（僧侶・作家）を選出した。

Ango
ANGO Awards
新　潟　市

2008年11／19（水）

新潟市民芸術文化会館
りゅーとぴあ・劇場
18：30より ＜入場無料＞

◆申込方法：往復はがきに希望人数（はがき1枚につき2人まで）、代表者の郵便番号・住所・氏名・電話番号を記入し、〒951-8550 新潟市役所文化政策課安吾賞係へ（11月5日必着。応募多数の場合抽選）
◆問い合わせ先／新潟市コールセンター　TEL.025-243-4894

第3回 安吾賞 2008

ANGO Award

瀬戸内寂聴（せとうち じゃくちょう）

天晴れなり。安吾精神の体現者。

一番会いたかった作家は坂口安吾だと言った86歳の乙女の瞳はきらきらと煌めいていた。安吾が「堕ちよ！生きよ！」と宣言した「堕落論」が氏の人生を変えたという。

プロデビュー作品における表現描写が過激だとして当時批判されるなど苦境に置かれながらも、旺盛な創作活動を展開し、女流文学賞受賞など作家としての地歩を築いた。しかし、1973年、51歳にして「現世」をあっさり捨て出家する。彼女にとっての出家とは、決して世捨て人になるのではなく、女でもなく男でもない、社会人でもない見地から人間を見直すことだったのではないだろうか。

どちらが彼岸か此岸か、そのどちらをも行き来しながら、「生きる」ということを独自の眼と筆致で解き明かし、今や名調「寂聴節」は世間を明るく救う。

「負」を背負い「負」を笑う、誠に天晴れなり。その生きざまは、「オンナ安吾」を名乗るにふさわしい。

略歴
1922年5月15日、徳島市生まれ。
作家／僧侶
東京女子大学国語専攻部 卒業
1956年 「女子大生・曲愛玲」で新潮社同人雑誌賞受賞
1961年 「田村俊子」で田村俊子賞受賞
1963年 「夏の終り」で女流文学賞受賞
1973年 中尊寺（岩手県平泉町）にて出家、法名寂聴
1974年 京都・嵯峨野に寂庵を構える
1987年～2005年 天台寺（岩手県二戸市）住職
1992年 「花に問え」で谷崎潤一郎賞受賞
1996年 「白道」で芸術選奨文部大臣賞（文学部門）受賞
1997年 文化功労者
1998年 NHK放送文化賞受賞。「現代語訳 源氏物語」全巻完結
2000年 徳島市名誉市民
2001年 「場所」で野間文芸賞受賞
2006年 文化勲章受章
2007年 徳島県県民栄誉賞受賞。比叡山延暦寺の直轄寺院「禅光坊」の住職に就任

撮影／永田理恵　提供／女性自身

新潟市特別賞

近藤亨（こんどう・とおる）

NPO法人ネパール・ムスタン地域開発協力会 理事長

1921年6月18日、新潟県加茂市生まれ。87歳

真理を語る言葉はシンプルである。

新潟で生まれ、新潟で農業を覚え、その技術を携えて、ヒマラヤの奥地に住み、現地で農業指導をすること三十余年。ネパールの特産果樹ジュナールの品種改良に成功し、世界で初めて標高四千メートルの高地での水稲栽培に成功し、現地の人々が見捨てて荒野となった広大な農地を、リンゴやアンズの果樹林に再生させた。

また、ムスタン地域開発協力会理事長として、新潟を中心とする日本全国の人々に呼びかけて、ヒマラヤ山麓に多くの小学校や診療所を建設してきた。

近藤亨が歩いてきた道は、今後、誰も踏み越えることができないだろう。すでに古稀を過ぎて、なおもチベットとの国境に近いムスタンの地に定住する。近藤亨は夢を夢のままにしないで、実現してきた男である。馬に乗り、果樹を剪定し、メロン、トマト、西瓜を育て、人知れずヒマラヤに骨を埋めようとしている。

農業は世界言語である。リンゴの枝の剪定に言語の違いは無い。近藤亨は自らの実践でそれを教え、ネパールの人々の生活を支えてきた。過酷な自然に囲まれたヒマラヤ山麓。そこで生きること。生き延びること。そのことのために、まず優れた農業技術を。近藤亨の生き方と彼の語る言葉はシンプルである。真理を語る言葉はシンプルである。まさに、安吾賞（新潟市特別賞）にふさわしいだろう。

受賞を祝して / 佐々木幹郎（詩人）

坂口安吾年譜

生誕　明治39年（1906）10月20日、新潟市に生まれる。学校に馴染めず、ひとり日本海に面する浜辺に寝ころんで思索した。荒漠たる風と日本海の風景は安吾文学の原風景といえる。

余は偉大なる落伍者となっていつの日か歴史の中によみがえるであろう　大正11年、落第が決定的となり東京の豊山中学3年に編入。この時、新潟中学校の机のふたに「余は偉大なる落伍者となっていつの日か歴史の中によみがえるであろう」と彫ったという。卒業後、下北沢の分教場の代用教員となり自然の中に悪童たちと遊んだ。この頃から求道の厳しさに対する憧れが強まる。

求道者、安吾　大正15年、東洋大学印度哲学倫理学科に入学。悟りを開くため多くの哲学宗教書を読破、睡眠4時間という厳しい修行生活を1年半続け神経衰弱に陥ったが、それを梵語、パーリ語、チベット語、フランス語、ラテン語などを猛然と勉強することにより克服した。

文壇デビュー　昭和6年、『木枯の酒倉から』、『ふるさとに寄する讃歌』、『風博士』を発表、文壇デビューを果たす。失恋の痛手を克服する決意のもと執筆した長編『吹雪物語』は酷評され、安吾は自分に絶望し、転居を繰り返し自らを孤独の淵に置きながら、どん底の淪落の生活を送る。しかし『紫大納言』（S15）、『木々の精、谷の精』（S15）などの新境地をひらく。

小菅刑務所・ドライアイス工場・軍艦に見いだす必然の美　昭和17年、国粋主義の時代、大胆な『日本文化私観』を発表し、伝統文化を鵜呑みにすることの欺瞞を指摘した。

堕ち切ることにより真実の救いを発見せよ　昭和21年、敗戦後の昏迷の中でいち早く戦後の本質を洞察し、4月『堕落論』、6月に『白痴』を発表。この2編は、若者を中心に戦後虚脱していた日本人に強い衝撃を与えた。戦前戦中の倫理観を捨て新たな生き方を指し示す革命的宣言は希望の書となり、『堕落論』によって戦後の日本が再スタートした。昭和22年『風と光と二十の私と』、『桜の森の満開の下』、『不連続殺人事件』、『青鬼の褌を洗う女』を発表。

戦う安吾　昭和25年、『安吾巷談』を連載し、戦後のタブーに挑戦する。昭和26年国税局と税金滞納、差押えをめぐって『負ケラレマセン勝ツマデハ』を発表。税金闘争をひとり戦い抜き、同年9月には競輪不正事件で自転車振興会を相手どり戦う。『夜長姫と耳男』（S27）発表。

急逝　昭和30年（1955）2月17日、古代史の雄大な構想とともに、原風景に由来する創造活動に意欲を燃やしはじめた矢先に、桐生の自宅で脳溢血で急逝した。享年48。

Ango
ANGO Awards